

インテル グローバル チャレンジ 2010

INTEL GLOBAL CHALLENGE AT UC BERKELEY

インテル グローバル チャレンジ 2010 には日本からも「ROCA K.K」と「Hapyrus」の2つのチームが参加しました。それぞれのチームの参加報告と活躍をご覧ください。

ROCA K.K. の参加報告と活躍

インテル グローバル チャレンジ 2010 の概要

2010年11月16日～18日、インテルとカリフォルニア大学バークレー校の主催するビジネスプラン・コンテスト、「インテル グローバル チャレンジ 2010」(The 6th Annual Intel Global Challenge) が開催されました。

今年度で6回目を迎える本コンテストは、毎年世界各国から技術ベースの新しいビジネスプランが集まり、これを世界トップレベルの投資家や経営者が審査するものです。年々参加チームのレベルがアップしており、特に今年度は世界19カ国から各国の予選を勝ち抜いた全27チームが参加し、そのほとんどがすでに収益を上げていました。



同志社大学	山口絵理	同志社大学	Shirley Osam
京都大学	鶴原悠悟	京都大学	兵頭克也
京都大学	森山豊	京都大学	持田拓也
京都大学	宮川竜平	京都大学	織田真也

チーム「ROCA K.K」

チームROCA K.K.は、京都大学の理工系学生5名、経済系1名、および同志社大学グローバルMBA 2名のチームです。日本の大学が開発したナノホールアルミナ（アルミ板にナノサイズの穴を有するアルミを製造する技術）を用い、海水を濾過して真水を作るフィルターをもって、今後巨大市場となるであろう海水淡水化市場に参入する、というビジネスプランを携えての挑戦となりました。

準備段階

「アルミ板にナノサイズの穴を有するアルミを製造する技術を何かに応用できないか?」それが今回のビジネスプランの始まりでした。多数の応用分野の中から「技術的障壁、競合優位性、市場規模」など多様な面から考えた結果、最も魅力的な海水淡水化ビジネスに乗り出すことにしました。次に、我々は

1. ビジネス的観点から「マーケットサイズの定量的な考察」、「顧客ニーズ把握のための電話ヒアリング」、「ファイナンスの定量的予測」
2. 技術的観点から「技術ライセンス取得のための大学教授訪問」、「プロトタイプ作成のための共同実験」、「特許出願申請」

を行い、プランの具体化を推し進めました。

メンバー8人から、多数の意見が出る反面、すれ違いや衝突も多く、議論が翌朝にまで及ぶことが頻繁にありました。

インテル グローバル チャレンジ大会期間中

• 日々改善

予行練習では、UC Berkeleyの教員と学生から、起業から事業拡大の行動指針を明確化すべきとの意見をいただき、ホテルに戻ってからもプランの改善に努めました。

• 英語での交流

当然、公式日程中のイベントやプレゼンテーション、日常会話に至るまで、すべて英語です。ここで日本人が世界の中で最も英語が話せないことを痛感しました。そんな状況でもほかのチームとの名刺交換や飲み会を通じて、貴重な交流をすることができました。

日本勢初の8強へ

チームROCA K.K.は、日本のチームとして初めてファイナリスト8チーム（最終選考対象）のうちの1つに選ばれました。

自己分析すると、評価された点は「市場規模の大きさ」「プレゼンテーションに工夫をこらしたこと」「日本国内のネットワークを活かしていること」であり、足りなかった点は「実現可能性の明確化」、「競合分析の徹底」、そして何より「質疑応答のための英語力」であったと思います。

今後の活動への期待

優れた新技術は、適切な事業アイデアと結び付くことで、ときに世界を変革するほどのインパクトを持ち得ます。日本の大学には、世界トップレベルでありながらも、その事業化に結び付けるアイデアや社会システムがないために、休眠している新技術が多く存在します。

今回の我々のビジネスプランも、多くの先生方の研究成果と、理系・文系の学生による事業化アイデアが結び付くことで、革新的なビジネスプランとなり、世界トップレベルのコンテストで高い評価を得たと考えています。

今回の我々の挑戦に対するインテルジャパンのご支援と、ビジネスプラン・コンテストを通して新たな技術を世に出そうとするインテルの姿勢に、最大限の感謝と敬意を表したいと思います。ありがとうございました。

Hapyrus の参加報告と活躍

1日目、顔合わせのランチ・ミーティングから始まったこのイベントは、午後にはpitch sessionと呼ばれる練習ステージを経た後、社会起業家として活躍している方の話や、元ネット企業のマーケティング責任者の公開授業に参加するなど、とても刺激的な経験ができました。2日目はいよいよセミファイナルで、実際にシリコンバレーでベンチャー・キャピタリストとして活躍している審査員の前でビジネスプランを発表しました。本場の審査員にジャッジされる経験は何事にも代えがたいものだと感じました。夜はレセプションが行われ、世界中の若い起業家との交流が持てました。3日目にはファイナリストによる発表が行われ、その夜に結果発表がありました。そこでは、インテルの技術フェローの話が聴くことができたのはとても良い経験でした。参加チームは3日間UC Berkeley近くのホテルに宿泊し、イベント内外でほかのチームとの交流もできたのは思わぬ収穫でした。



東京大学大学院 情報理工学系研究科 修士課程 藤川 幸一

大規模データ処理の世界を変える

私のチームが発表したプランは、大規模データ処理技術をWeb上で提供するビジネスです。近年のWebの急速な発展によって、ニュースや動画、写真など、処理すべきデータはどんどん増えていますが、それを処理する技術は十分に成熟しているとは言えません。そこで、Googleが利用している大規模データ処理技術のオープンソース版、Hadoopという製品をWeb上で簡単に使い、さらにその知識を容易に再利用可能にできるようにするためのサービスを開発するのが、私たちのビジネスです。

受賞は逃すも、得難い体験を得る

私たちのチームは、残念ながら受賞することはできなかったのですが、私たちのチームに対するフィードバックはとても役に立つものばかりでした。技術・アイデアは素晴らしいと言ってく一方、プロトタイプの完成度や、競合への対策などを指摘されました。大規模データの処理自体はまだまだ始まったばかりのビジネスなので、それを収益に結びつけていく努力が今後の課題です。また、世界の優秀なチームのプレゼンテーションを見ることができたことも素晴らしい体験でした。優勝したチームは非常に強いビジネスモデルを持っていましたが、そのうえでのプレゼンテーションの素晴らしさが受賞につながったと思います。また、各チームの綿密に練られた説得力のある事業計画は非常に参考になりました。

今回の体験をもとに次のステップへ

今後、インテル グローバル チャレンジで得た経験・フィードバックを元に、実際に事業化を目指して努力していきたいと思っています。実はシリコンバレーでは大規模データ処理に特化したスタートアップは増えてきているのですが、そのなかでも集合知やオープン性に特化した企業はまだ現れていないので、その分野でNo.1を目指し、これからの情報爆発社会で社会に大きな影響を与えられるビジネスを実現していきたいと考えています。

今回のインテル グローバル チャレンジへの参加はインテルのご支援あって実現しました。素晴らしい経験をさせていただき、誠にありがとうございました。